



Vision

「ひとつ進歩の証」

昭和大学第二生理学教室

本間生夫

昨年7月に多くの学会を震え上がらせた出来事がありました。学会事務センターの破綻でした。学会費徴収から学会業務一般を委託していた学会は大きな損失を被りました。生理学会は独自の事務所を持ち、独自で運営していたため、この被害にあわずにすみしました。被害を被った学会は学会運営の手間と費用を考え、学会事務センターに業務の全てを委託していたところも多かったに違いありません。何事も手間を惜しんではいけないという教訓でしょう。生理学会の英文機関誌であるJJPは昨年まで学会誌刊行センター（学会事務センターとは別の法人）に業務を委託してまいりました。しかし今年から前号でお知らせしたように業務を他社に移し、購読料の徴収と予算編成は生理学会独自で行うことになりました。今年一年生理学会の会計幹事を務める者として会員諸氏にはご理解とご協力を賜りますようこの場で再度お願い申し上げます。また生理学会も社会的責任を考慮し、法人化を検討する時期に来ていることも合わせてご報告申し上げます。

さて2005年を迎え、私自身の過去を振り返って思ったことを述べてみます。過去を振り返るぐらいの齢になってしまったということですが、私が生理学教室に入ってから30年が過ぎました。その間一貫して呼吸生理の研究を続けてまいりました。振り返って思うのは、この30年間の研究でこの先残っていくものは何であろうか、ということです。分野の異なる方には興味がわかないか

もしれませんが、呼吸生理学の分野で最大のテーマは呼吸リズムがどこでいかにつくられているのか、というものです。リズムカルな呼吸運動を目にしながらそのリズムの基が分からない。そういう最も大きな未知なるものへ挑戦する研究者が増えてくるのは呼吸の分野だけではないでしょう。私が研究を始めた頃も呼吸リズムは最大のテーマでした。呼吸リズムはペースメーカー細胞によりつくられているのか、神経ネットワークでつくられているのか、多くの学会の場で激しい論戦が繰り返られていました。当時ペースメーカー説を唱えていた人たちの最大の弱点は説にとどまり、実際に呼吸のペースメーカー細胞を見つけられていなかったことでした。必然的に神経ネットワーク説のほうが優勢でした。現在ではペースメーカー細胞の活動が記録され、少なくとも呼吸運動は呼吸リズムジェネレーターとパターンジェネレーターに分けて考えられるようになってきています。ここではそのことを詳しく述べるつもりはありません。30年前から10数年の間、この研究分野のリーダーであったある人が一線を引き、そして亡くなりました。彼は呼吸リズムの神経ネットワーク説を主導しており、その点からも当時ペースメーカー説は不利でありました。数限りない彼の論文は必ず引用され、引用しない限り呼吸リズムは語れませんでした。しかし亡くなった今、彼の論文はほとんど引用されなくなりました。そしてペースメーカー説が前面に出るようになりま

した。彼の研究成果の中で残ったものはいったい何なのだろうか。彼の膨大な研究論文の一部に携わったものとして考えずにはられないのです。「やはりペースメーカー細胞はあるのではないでしょうか」という私に彼は弟子を思う心と、絶対に認めないという信念を見せつけました。当時と

比較して呼吸生理学の研究は研究方法の進歩とともに変わってきています。だから過去のものも消えていくのかもしれませんが、消えていくことが、消えていくものがあることが進歩の証であり、その進歩に貢献しているのものであると思いたいのです。